

敏感♡体質を隠しているつもが、
後輩に変態バレ♡して、
分らせオナニー指導のすえ、
無事にメスおち♡してしまう話♡

ほのまる

入社から五年、橘裕香（たちばなゆか）は中堅社員として信頼され、バリバリと仕事をこなしている。

三十手前ながら、お局などと影口を叩かれているのも知っているが、そんなことはもうどうでもいい。

黒縁眼鏡にひつつめ髪、地味な服装がトレードマーク。愛想がないのは、人を寄せつけないため、わざとやっている。

——誰かと馴れ合いたい訳じゃない。私は私の仕事を淡々と……。

「橘さあくん」と間伸びした声で呼ばれ、それまでの思考が途切れる。

軽い足取りでこちらに迫ってくる、180センチはゆうに超えた背に、シャツの上からでも分かる筋肉質な体。もさもさした黒髪で隠れがちだが、たまに見える顔がイケメンだと、女子たちが騒いでいる男。

水瀬健斗（みなせけんとう）。他部署から最近になって配属され、裕香が指導をすることになった後輩社員。決して優しい指導などしていないのに、なぜか懐かれている。「睨まれた」と評されることが多い鋭い視線を彼に向けるも、どこか恍惚とした表情を浮かべたように見え、困惑する。

「こちらの資料、確認して頂きたいのですが……」

彼から渡された資料の締め切りは、まだ余裕がある。もじもじとした態度のわりに、仕事は早いのだ。

無愛想に今日中には確認すると伝える裕香を、上から水瀬がじつ…と見つめる。勘違いかもしれないが、その瞳に熱がこもっているようで、こちらの体温まで上がってくる。

そんな思考を振り払うように、気にしないそぶりで水瀬を見返すと、わずかに、唇の端があがった気がした。

…ぞくつ、と背筋が粟立つ。

彼と話すと、いつも変な空気になるから苦手なのだ。裕香がどれだけ突き放そうとしても懷いてくるし、指導する立場なので避けようがない。

もう何も話すことはないのに、2人して見つめ合っているなんて、おかしい。

このままじゃ、いけない。なんとか言葉を搾り出し、「つ、それじゃ」と言い踵を返す。

早足で駆ける背中に、未だに彼の視線が張り付いているようで、足をもつれさせながら、慌ててその場を離れたのだった。

裕香は人混みが苦手だ。極力なら電車やバスに乗りたくない。そのため、会社から自転車で十分ほどの距離にマンションを借りている。

今日も自転車で帰路につきながら、もの思いに耽つてしまう。

水瀬が来てからというもの、いけないことだと思いつながら、彼のことはばかり考えてしまう。だから余計に、彼とは距離を置きたいのに。

近くに迫った筋肉質な肉体と、じつとりと見下ろすあの視線。思い出すと、サドルに跨がる股間が、きゅん♡と疼いてしまう。

（あ、あつ、だめ……っ♡）

いちど考え出すと止まらない。きゅんきゅん♡と疼く下部に、自転車の振動が来るだけで感じてしまう。

通行人の誰も、裕香が自転車に乗りながら性的に興奮しているなど、想像もしないだろう。

昔から、裕香は人には言えない秘密があった。性的なものへの感度が、人一倍強かったのだ。

アダルトビデオを見ているだけで、自分も同じことをされているかのように、絶頂に達してしまうこともあった。

ひとたびえつちな妄想をし出すと、他人に少し触られるだけでも、敏感に反応してしまう。

必要以上に異性を避けるようになり、後ろめたさからか同性の友達とも距離を置いてしまった。他人と距離を置くことでしか、自分を守れなかった。

そんな自分が珍しく後輩に懷かれ、しかもそれがそんなに嫌でないことにも、混乱している。

今までも、これから、他者との関わりを避けて生きていくつもりだったのに。何かと距離が近い彼のことを、次第に強く意識してしまうようになった。

この性癖が誰にもバレないよう生きるのが、裕香にとって最優先だったはずなのに。

——こんな私のことを知られたら、水瀬君にも、変態扱いされるに決まってる。

彼に冷めた目で見下ろされる場面を想像し、下腹部にきゅうっ♡と熱が溜まった。

慕ってくれる後輩を冷たくあしらっているのに、その裏で、彼をいやらしい妄想に使っている。

募る罪悪感とは裏腹に、仕事に見つめてくる水瀬の視線を思い出し、下腹部にず

くずく♡熱が溜まっていく。

信号で停車すると同時に、片足を地面につける間際、ぐりぐりいッ♡と陰部をサドルに押し付けてしまう。

(あっ♡………ッ♡♡)

見たところ周囲に人はいないが、羞恥心で余計に膣が反応する。

大きな眼鏡で少しは隠れているが、こんなだらしない表情、人に見られていいものではない。

体重を片方の足にかけ直すと、また股間をぐりりっ♡と刺激してしまい、下肢が震える。

おしっこを漏らしそうなムズムズとした感覚が広がり、我慢するためにキュツと膣に力を入れる。

(………っ♡は……っ♡)

我慢しようと力を入れたのに、より強い刺激に肩がビクンッ、と跳ねる。吐息のよくな喘ぎが漏れそうになり、すんでのところでこらえる。

——このまま、腰を前後にゆすって、おまんこをぐりぐり擦り付けたい♡

サドルの上で、かすかに腰を揺さぶると、敏感になったクリトリスと膣口が刺激さ

れる。

(———ッッ♡あ、あ♡)

そのままグっ♡グッ♡とクリトリスを押し潰す。

(んっ♡んっ♡あ、いく、イキそっ♡)

刺激に夢中になり始めたそのとき、大きな音を立てて、信号が変わる。ハッとして、急速に興奮が冷めていく。なんて、恐ろしいことをしているのだろう。

なんとか自転車を降り、刺激のもとから離れる。ひどい罪悪感にかられながら、とぼとぼと歩き出す。

なんて馬鹿なんだろう。こんな自分がいやになる。

冷静になればこんなことおかしいと分かるのに、火照り出すとその欲情を抑えきれない。

以前は、これほどではなかった。まさか自転車に乗りながら、こんなにいやらしいことをしてしまうとは…。

水瀬が来てから、自分は余計におかしくなったのではないだろうか。

やはり、徹底的にあの男を避けるしか、道はないかもしれない。

これからは今以上に関わりを避けるよう、よりいつそう努力をしなければいけない

…！

そう固い決心をしたのだが、こんなにも早く、その決意が揺さぶられることになるとは、裕香は想像もしていなかった。

「しゅ、出張お！？みつ、水瀬とですか！？」

課長に食つてかかるも、どこ吹くかぜで「ああ」と返事をされる。

「水瀬もこれで案外、先方からのウケは良いんだ。お前も水瀬と一緒に仕事をして、学ぶことはあるぞ」

案外つて失礼ですね〜と水瀬がヘラヘラと笑う声が、遠くに聞こえる。

あんな決心をしたすぐあとだというのに……！2人っきりの出張など、地獄である。そしてまた、先輩としての面目も丸潰れであった。ぶっきらうではあるが、人一倍仕事は頑張ってきた誇りがあるというのに。

よりにもよつて、水瀬から学べなどと言われるとは……。隣りで愛想良く笑う彼に、力なく視線を向ける。

「せ…、先輩が、僕に指導してくださったおかげですから。僕のほうこそ、今回は橘先輩から学ばせて頂かなきゃ、です」

謙虚に言われると、よけいに惨めになる。たぶん今はどんな反応をされても、マイナスにしかない。

己の不甲斐なさは心のどこかで分かっているのに、素直に反省ができない。そこが周囲から孤立する自分の悪癖だと分かっているのに。

水瀬くん可哀想う、ヒソヒソと話す誰かの声が聞こえた。

——そりゃあ、そうだろう。私だってそう思う。

「じゃあ、頼んだぞ。水瀬、……橘」

その課長の声が、耳の奥に静かに沈んでいった。

新幹線の内車、よりにもよって水瀬と並んで座るはめになった。裕香が窓側に案内されたが、体格の良い彼が隣りに座ると、圧迫感がすごい。ただでさえ電車は苦手だというのに、2列シートにぴたりと隣り合わせるなど、苦痛である。

顔色を伺いながらちょこちょこ話しかけてくる水瀬を適当にあしらいつつ、資料を読むふりをする。……資料など、頭に入る訳もないが。

急な出張で準備に追われ、昨日の夜はオナニーもできなかった。少しでも発散しておきたかったというのに。

そんな焦りからか、よりいっそう緊張してしまい、些細なことでも敏感に感じ取ってしまうのだ。

出かける前、シャワーを浴びているのだろうか。隣に座る水瀬の体から、風呂上がり特有の、清涼な香りがふわりと広がる。

ほのかに彼の汗の匂いが混じっているようで、男の雄味が間近に感じられ、変な気分になってしまう。そんな自分の変態さに、ほとほと呆れる。

だめだと思えば思うほど、少しの感覚にも敏感になってしまう自分が、心から恨めしい。

そんなとき、左の太腿を、さわっ♡と撫でられる感触があり、ピク、と反応してしまう。

「……っ」

声こそ出ないものの、体が震えた裕香に、「す、すみません」と慌てた声が降り注ぐ。

「飲み物を取ろうとして…。あ、当たっちゃいました？」

「別にっ、大したことじゃないけど…！き、気をつけて、ね」

動揺して、声が裏返ったのがバレていないだろうか、気が気ではない。

注意されたことをさほど気にした様子もなく、水瀬はもう一度謝罪したあと、ごそごそと何かを取り出す。

「小腹が空くかなと思って、駅なかのおにぎり屋さんで、色々買ってきて…」

橘さんもうどろどろ、と鮭おにぎりを差し出してくる。裕香の好物の鮭が、贅沢なおにぎりからはみ出している。申し訳ないと思いますが、動揺を隠すためそそくさと受け取ってしまう。

ありがとう、と簡単に礼を言い一口食べると、鮭の旨味が口に広がる。

（う、うま……）と感動しつつ黙々とおにぎりをほうばっていると、やけに水瀬が静かだと思う。

ちらりと横を見ると、長い前髪の隙間から、こちらをじつ……♡つと見つめていた。（な……！！？）食べている姿を、ずつと見られていたのだろうか。もごもごと動かしていた口元を、急速に意識してしまう。

「な、何!？」

思わず強い口調で問い詰めると、慌てて目を逸らされる。

「お、美味しそうに食べてもらえるのが嬉しくて…。すみません」

水瀬は、あまりに無遠慮に自分を見ている。それは、きっと気のせいじゃない。今

までの疑念が、確信に変わっていく。

（なんで、私のことばかりじろじろ見るの……！じつとり、舐めまわすように、いつも、見つめてきて…）

そんなことを考えていると、じわりと股が濡れる気配がした。

（最低……！こんな自分も最低、バカ！）

おにぎりも食べ終え、ひとり自己嫌悪に陥っていると、今度は確実に、左手の甲を、すりい♡とさすられた。

「ひゃ……っ」

抗議の声を上げようとする、

「…………米粒が付いてますよ」

さらに、すりすりいつ♡と撫でられ、

「んうっ……」

変な声が出てしまった。心臓がバクバクして、顔が上げられない。まなじりに涙が溜まっていくのが分かる。

（終わった……………！）

硬直する裕香に、水瀬がのんびりと声をかける。

「橘さんって、案外おつちよこちよいな所がありますよね。可愛いなあ」

ヘラヘラと声をかけられ、本当なら睨みを効かせてやるところだが、へにやへにやと力が抜けて、何の反応も返せなかった。

（大人しくしてれば、可愛いとか……！調子に乗りすぎなんだけど……！）

でも、今の裕香にとっては、敏感体質がバレないことのほうが最優先なのだ。気付いているのかいないのか分からないが、とにかく何も言われなかったのなら、それだけでも良かった。

気が抜けたのだろうか、関わるのが嫌すぎて、仮眠するふりをしようと思っていたものの、本当に寝てしまったらしい。

水瀬に声をかけられて、熟睡してしまっていた自分に気付く。慌てて荷物の準備をし、慌ただしく新幹線を降りる頃には、先ほどのことは頭から消え去っていた。

ホテルのチェックインを済ませ、部屋で荷解きをする。

スーツのジャケットは脱ぎ、ワイシャツと黒いタイトスカートの格好で、部屋の中をパタパタと歩く。

括った髪も下ろすと、鎖骨より少し下くらいの長さになる。眼鏡も外しているが、もともと形だけのものです、視力は悪くはないので、問題はない。

（明日は朝からだし、夜はゆっくり部屋で休もう）

まだ夕方だが、もちろん水瀬と夕食をとるつもりはない。食事は近くのコンビニで買って、簡単にすませることにしている。

ピンポンと部屋の呼び鈴が鳴る。次いでコンコン、と音がしたあと、水瀬の呼ぶ声が聞こえた。

いったい何の用事だろう。少しだけドアを開け「なに」と言い顔を覗かせる。少し目を見張った水瀬が、言葉を失っている。

裕香もまた、彼が前髪を上げている姿を初めて見たので、思いのほか端正な顔立ちに驚き、固まる。

裕香のほうが先に我に帰り、「な、なんの用事？」と声をかけると、ハツと思い出したように水瀬が口を開く。

「夕食、一緒に…と先ほどから連絡を…」

スマホに連絡が来ているのは知っていたが、ずっと無視をしていた。

明日のことも話したいし…、と言い募る水瀬を憮然と見上げながら、意を決して言

う。

ごめんだけど、と前置きし、

「仕事とプライベートは混同するつもりはないの。私も勝手にするし、水瀬くんもひ
とりで夕食をとってくれる？これからしなきゃいけないこととかある」

と言いかけたところで、水瀬が遮った。

「オナニーですか？」

（……………え？お、おな？）

あまりに平然と言うので、こちらが面食らってしまった。

（え、いま、オナニーって言った？…この人）

「こないだも、仕事帰り、オナニーしてましたもんね」

「自転車のサドルに、グリグリ♡おまんこ押し付けて」

ドッドドッ、激しく脈打つ心臓の音が聞こえる。びつくりして動けない。

その間にドアを大きく開けられ、中への侵入を許してしまう。簡単に壁際へ追いやられ、デカイ図体の中に閉じ込められる。

「自転車の上で、股間前後にこすってましたよね？」

壁に両手をつけて裕香を見下ろし、耳元で囁く。

なんで。

どうして。

見られていたのか。

言い訳をしなればいけないのに、驚きすぎて言葉が出てこない。何も言わないということは、肯定することになってしまうのに。

「へんたい、だったんですね♡」

水瀬のその一言に、涙が込み上げて、鼻がツンとする。

「あゝ、せんぱい♡そんな、泣かないで♡」

親指の腹で目元を優しくさすられるが、こちらはそれどころではない。

「い、言わ、ない、で」

「何を？」

（何をつて、そんな……）

「サドルオナニーでイクイクする変態だつて？」

「……………っつ」